

やさしい日本語で読む日本文学

レベル 中級

# 虹の橋

【原作】野口雨情

【簡約】熊谷未来・高橋なつ

【挿絵】村上璃奈



ある山国やまぐにに、美しい湖うつくしみずうみがありました。

この湖みずうみには、昔むかしから、不思議ふしぎなことがたくさんありました。きれいな水みずが急に汚きたなくなったり、空そらに星ほしがないのに、湖みずうみには星ほしが見えたりしました。村むらの人ひとたちは、これには何か理由りゆうがあると思おもいました。しかし、その理由りゆうは湖みずうみにいらっしやる水神様すいじんさましか知りません。

とても不思議ふしぎだったのは、湖みずうみにかかる「虹にじの橋はし」でした。その虹にじはとてもきれいで大きくて、村むらの人ひとたちも虹にじが出でると、見みに行いきました。

この湖みずうみの周まわりには、二ふたつの村むらがありました。村むらの人ひとたちは魚さかなをとったり、布ぬのを作つくったり

して暮らしていました。

一つの村には、おたあちゃんとおきいちゃんという女の子がいました。二人は同じ歳で九歳でした。どの姉妹より二人のほうが仲が良く、顔も似ていたので、村の人たちは「姉妹だ」と思いました。

しかし、おたあちゃんの家はお金持ちで、おきいちゃんの家はお金がありませんでした。また、おたあちゃんには元気なお父さんとお母さんがいましたが、おきいちゃんにはお父さんもお母さんもいませんでした。おきいちゃんは赤ちゃんの時分から、おじさんとおばさんと暮らしています。

ヨモギ



セリ



この村に、春が来ました。  
おきいちゃんとおたあちゃんは、セリやヨモギをよく採りに行きました。

ある日二人は、土筆を採りに行くことを決めました。おたあちゃんのお母さんは、二人にお弁当を作ってくれました。おたあちゃんのお母さんが言いました。

「三又土筆があるかもしれないから、気を付けて見なさい。珍しいけど、あるかもしれないよ。見つけたら『出世する』と言われている。仕事が良くて、生活に困らなくなるから、探してみなさい。」

出世すると言われて、二人はうれしくなりました。おたあちゃんが言いました。

「私、三又土筆はあると思う。」

おきいちゃんが言いました。

「私も、あると思う。」

「二人で見つけよう」

「二人で幸せになろう」

「オホホホオホホホ」

「オホホホオホホホ」

二人で笑いながら、川の方へ行きました。二人は川の近くで、楽しく土筆を採りました。百メートル、二百メートル行くと、二人は静かになって、どんどん土筆を採りました。

つくし  
土筆



みつまたつくし  
三又土筆



お昼頃ひるごろになると、二人ふたりはお弁当べんとうを食たべました。おたあちゃんは言いいました。

「三又土筆みつまたつくしは本ほん当とうにあるのなかな？おきいちゃんはどう思おもう？」

おきいちゃんは答こたえました。

「私わたしは、ああると思おもう。」

「私わたしは分わからなくななった。」

「ままだここれかららだよ。」

二人ふたりはままた、土筆つくしを採とりました。

夕方ゆうがたになると、二人ふたりが採とった土筆つくしはいいっぱいいになりました。しかし、三又土筆みつまたつくしは見みつけら



れませんでした。

おたあちゃんは「帰りましょう、帰りましょう。」と言いましたが、おきいちゃんは「もうちよつと、もうちよつと」と言いつて土筆を採りました。

「私、もう疲れた。」とおたあちゃんは土筆を採ることをやめて、立って見っていました。

するとおきいちゃんは、

「おたあちゃん、あつた！あつた！三又土筆だ！」

と、うれしそうに大きな声で言いました。



おきいちゃんの三又土筆を見て、おたあちゃんは言葉が出ませんでした。そして、残念そうな顔をして、おきいちゃんの顔を見ました。おきいちゃんは、おたあちゃんのそんな顔を初めて見たので、とても驚きました。

おたあちゃんは

「私も探そう。」

と言って、どんどん行きました。おきいちゃんは、少し怖かったです。後ろからついていきました。おたあちゃんは一生懸命、三又土筆を探しましたが、見つけれませんでした。

夜よるになりましたが、おたあちゃんは帰かえろうとしません。

「おたあちゃん、また明日探あしたさがそう?」

とおきいちゃんが言いいましたが、おたあちゃんは何なにも答こたえませんでした。

暗くらくなって、土筆つくしも草くさも、見みて分わからなくなりました。

おたあちゃんの泣なきそうな顔かおを見ると、おきいちゃんは、何なにも言いえませんでした。おたあ

ちゃんは、自分じぶんだけ三又土筆みつまたつくしを見みつけられなかったことがとても残念ざんねんで、もうおきいちゃん

と遊あそびたくないと思おもいました。

二人ふたりは何なにも言いわず、暗くらい道みちを歩あるいて、今いままで来きた道みちの方ほうへ帰かえりました。

おきいちゃんは、三又土筆みつまたつくしを採とったことがうれしくなくなり、おたあちゃんにあげようと思おもいました。

おたあちゃんは、おきいちゃんの三又土筆みつまたつくしを見て、急に悪わるい気持きもちちになって、その土筆つくしを取とって川かわへ投げなげました。

驚おどろいたおきいちゃんは、川かわの中なかへ落ちおちてしまいました。

おたあちゃんは後ろうしろを見みないで走はしって、一生懸命家いっしょうけんめいに帰かえりました。

「おきいちゃんはどうしたの？」

とお母さんかあに聞きかれた時とき、

「先に帰った。」

と言って、何も知らない顔をしました。

#### 四

次の日、いつも遊びに来るおきいちゃんは、来ませんでした。お母さんは、『おきいちゃん  
とけんかしたの?』とおたあちゃんに言いました。お母さんは、三又土筆のことで二人がい  
い友だちじゃなくなったことを知りません。おたあちゃんは「ううん」「ううん」と頭を横に  
ふりました。

その次の日も、その次の日も、おきいちゃんは遊びに来ませんでした。

お母さんは「けんかをしたんでしょう？」と聞きますが、おたあちゃんはずっと頭を横にふります。

あとで、近所の人から「おきいちゃんが病気になった」と聞きました。

おたあちゃんのお母さんは「見舞に行きなさい」と言いますが、おたあちゃんは行きませ  
んでした。

おたあちゃんは、今、あの日のことを「私は悪いことをした」と思いました。おたあちゃん  
の気持ちが強くなって、どんどん心がきれいになりました。おたあちゃんは三又土筆のこと

を<sup>かあ</sup>お母さんに<sup>はな</sup>話そうと思<sup>おも</sup>いました。でも、お母さん<sup>かあ</sup>が心<sup>しんぱい</sup>配すると思<sup>おも</sup>って、一<sup>ひとり</sup>人で「おきいち  
やん、ごめんね」と思<sup>おも</sup>っていました。

そして、夏<sup>なつ</sup>になりました。毎年夏になると、湖<sup>みずうみ</sup>に虹<sup>にじ</sup>がかかります。

今年も虹は湖の上に太鼓橋かけた

去年も虹は湖の上に太鼓橋かけた

昔も今も虹は湖の上に太鼓橋かけた

湖の上に大きな大きな太鼓橋かけた



きょう むら こ  
今日も村の子は、湖の近くに立って歌っていました。

## 五 こ

そのあと、おたあちちゃんとおたあちちゃんのお母さんは、おきいちゃんの家いえの近くちかを歩きま  
した。二人はびっくりしました。戸とが閉しまっています。だれもないみたいです。近所きんじよの人は、  
おきいちゃんは前まえの月つきに、湖みずうみよりも遠とほくにある村むらに行いったと言いいました。

最近さいきん、おきいちゃんの病気びょうきはなおったけど、おばさんが病気びょうきになったそうです。

おじさんも若わかくないです、お金かねもたくさんありません。おきいちゃんは元氣げんきになってすぐ、



湖みずうみより遠とほくにある、布ぬのを作る「機場はたば」というところで働はたらき始めはじめました。そのとき、おじさんとおばさんほかも他の村むらに行いったみたいです。

おたあちゃんのお母かあさんは「かわいそうだね」と泣なきました。おたあちゃんも泣ないています。おたあちゃんは次つぎの日ひから何回なんかいも、水神様すいじんさまにお願ねがいしました。「水神様すいじんさまおきいちゃんを助たすけてください。本ほん当とうに私わたしが悪わるかったです。三又土筆みつまたつくしがなければ、私わたしは苦くるしい思おもいをしませんでした。本ほん当とうに私わたしが悪わるかったです。水神様すいじんさま、おきいちゃんを助たすけてください。」

すると、こっちの村むらに船ふねに乗のって来くる人ひとたちが、こんな歌うたを歌うたい始めはじめました。

湖みずうみの風かぜは何なんと言いっていいた

明日あしたは帰かえろうう生うまれまれたわ村むらへ

湖みずうみの風かぜはどどこからかららいいた

機屋はたやのうし後うしろろからかららいいた

## 六 ろく

水神様の家は、湖の近くで、大きな杉の木がたくさんあります。少し高いところにあるので、そこから天気がいい日は、湖よりもずっと遠くの村までよく見えます。

おたあちゃんが水神様の家から遠くの村を見ていると、大きな虹が湖の上にあります。その虹は遠くの村から、こっちの村までの橋のように見えました。村の子どもたちが湖の近くに立って、虹の歌を歌っているのが聞こえました。



おたあちゃんは最初、虹をずっと見ていましたが、少しずつ悲しくなってきました。それは、昔二人で遊んでいた夏にも、夕方に大きな虹があったからです。そのときおきいちゃんはひとりで、しずかに言いました。

「虹の橋の上には天国があるんだよ。そしてそこには、きれいな花がたくさんあると思う。私は死んだら天国に行くの。おたあちゃんも来てね。私が死ぬとき、大きな虹の橋が出てきたらいいな。」

「私もいつしよに行くよ。」

「そう。」と言っておきいちゃんは、なぜか泣いたことがありました。

虹はずっと無くなりませんでした。おたあちゃんはすごく悲しくなって、急いで家に

帰りました。

家に帰るときも、おきいちゃんのことを思い出して悲しくなりました。

それからすぐに、おきいちゃんが機場で死んだと聞きました。おたあちゃんが水神様の家で、大きな虹の橋を見た日に、おきいちゃんが死にました。

湖にいる船に乗った人たちは、いつ、どこから聞いたのかわかりませんが、またこんな歌を歌い始めました。

てんごく はな  
天国の花がほしいなら

うた き  
歌が聞きたいなら

あか ぞうり は  
赤い草履履いて

にじ はしわた  
虹の橋渡れ

てんごく はな み  
天国の花が見たいなら

うた こい  
歌が恋しいなら

あか げた は  
赤い下駄履いて

にじ はしわた  
虹の橋渡れ



虹の橋は湖の上に、何回もかかりました。

虹の橋がかかると、おたあちゃんは水神様の家に行きました。

—水神様、私は虹の橋を渡って、天国へ行きたいです。おきいちゃんのところに行きたいです。お願いします。—

いつもお祈りをしていると、おたあちゃんの心は、美しくきれいになりました。

心がだんだんきれいになると、虹の橋の上に天国が見え始めました。毎日見ていると、だんだんはつきりと見えました。

天国てんごくから、歌うたが聞きこえてきました

おたあちゃんは、ずっと聞きいていました。すると

「おたあちゃん、おたあちゃん」

と呼よぶ声こえがしました。

「あ！おきいちゃんの声こえだ！おきいちゃん、おきいちゃん、ごめんね、私も天国てんごくに行くよ。今いま行くよ。おきいちゃん、おきいちゃん、ごめんね。」

おたあちゃんは、同おなじことを何なん回かいも言いいました。

それから少すこしして、おたあちゃんがいなくなりました。湖みずうみには、小ちいさい虹にじの橋はししか、かか



らなくなりました。すると、船ふねに乗のった人ひとたちがこんな歌うたを歌うたい始はじめました。



湖の上みずうみ うえに

天国てんごくに行く

虹にじの橋はしかけた

二人ふたりの子供こども

渡わたって行いった

赤あかい下駄げたはいて

赤あかい草履ぞうりはいて

一いっしょ緒いに行いった



下駄



草履

船ふねに乗のっている人ひとたちは、いつまでもこの不思議ふしぎな歌うたを歌うたいました。村むらの子供こどもたちも歌うたいました。どうしてこの歌うたがあるのか、知しっている人ひとはいません。

知しっているのは、水神すいじんさま様さまだけです。

やさしい日本語で読む日本文学  
『虹の橋』

2022年3月1日発行

発行 宮城学院女子大学 学芸学部 日本文学科

印刷 株式会社 フロット

許可なしに転載・複製することを禁じます。